

2008（平成20）年6月5日 ヒアリング資料

東京原告番号18番浅倉美津子

明日2008年6月6日で、私がフィブリノゲンを投与されC型肝炎ウイルスに感染してから、20年になります。その時出産した次男が明日20歳の誕生日になります。そんな記念すべき前日に話をさせて頂く機会を頂き感謝申し上げます。

1 フィブリノゲン製剤を投与されたときの状況

私は次男を出産した直後の記憶や体感を今も忘れる事ができません。次男の出産時の出血が少し多かったため、輸血はHIVが怖いので、その代わりに何かを点滴しますと言われ、フィブリノゲン製剤が投与されました。氷水のような液体が私の体中の血管を瞬時に駆け回りました。途端に歯の根の合わぬ様な震えがありました。

熱がどんどん上がり、私は一体どうなってしまうだろうと、不安で一杯になりました。暫くして次男と対面した時、本来は感動のシーンとなるはずなのに、私は自分の身体の異変に対応するので精一杯で、次男の誕生を喜ぶ余力もありませんでした。次男は、まだ見えてない眼を見開いて私に大丈夫だよ、頑張ろう、と言っているようでした。

出産の翌日以降も身体がだるく、微熱が続いたため、なかなか退院出来ませんでした。私はまだ幼い長男と、産まれたばかりの次男が気になって気が気ではなく、産後2週間ほどしたころ退院後も通院することを約束して、やっと退院を認めてもらいました。

先生を説得して退院したものの、産後の体調は酷いものでした。家事どころか夜中お腹をすかして泣き叫ぶ次男にミルクを作ってあげる体力も失くしていました。私は結局退院して10日ほど過ぎたころ、急性肝炎を発症し、小学校1年生になったばかりの長男と年まれたばかりの次男を夫に任せ、約2か月の入院をせざるをえませんでした。当時、C型肝炎ウイルスに何故感染したのか原因は解りませんでした。だから私は37歳で高齢出産した事、出血等で体力が落ちて感染してしまったのだらうと、私のお産の仕方が悪かったために子供たちや夫につらい思いをさせてしまったと自分を責めていました。

2 C型肝炎に奪われた私たちの夢

私は感染して十数年して慢性肝炎に進行していると診断されました。

病気を忘れようとした事もありました。ですが、私は知人の肝炎患者さんから肝炎が肝硬変や肝がんに進行する怖い病気であることを知っていたので、毎月或いは数か月毎の検査日は忘れずに欠かさず受診しました。子供達はまだ小さかったけれど、お母さんは疲れたと言ってはよく横になっていると言う印象だったようです。

私の夫は演劇家で、私は夫の演劇にのめり込む姿に共感し、共に人生を歩んでいこうと

決意して結婚しました。夫の演劇活動では十分な収入とならないため、私が働いて家庭の収入を得て、夫には好きなだけ演劇活動に励んでもらおうと思っていました。共に白髪の生えるまで…それが私の生きがいでした。

でも私は肝炎ウイルスに感染してしまいました。私は十分に働くことができなくなり、夫を支えるどころか、生活のため夫に演劇をやめてほしいとまで言わざるを得ませんでした。その後、夫とは事実上別居生活となりました。

5年前私の肝炎ウイルスが再び暴れだして入院した時、夫は見舞いにもきませんでした。それから間もなく私はちっぽけな愛情をあきらめる決意をしました。私達は離婚をしました。

C型肝炎ウイルスは私のささやかな幸せを奪いました。先ほどお話しした私の知人の肝炎患者さんは、肝がんで亡くなってしまいました。彼女は女優で、亡くなる直前まで仕事に復帰したいと願っていたのに、その夢を奪いました。東京原告13番さんは私は生きたいと訴えながら亡くなってしまいました。

3 インターフェロン治療について

私は4月からインターフェロン治療を受けています。副作用は個人差がある事を知り、あまり心配し過ぎてもよくないと自分に言い聞かせ、何よりやっこの治療に入れる喜びのほうが大きく治療に臨みました。

4月10日に第一回目のインターフェロン投与があり、その後5～6時間してから37度台の熱が上がりだしました。23時くらいにはインフルエンザ様の症状、悪寒、節々の痛み、39度まで熱は上がり続けました。朝になると熱は下がりますが、今日まで8週続けて、微熱は続き丸一日平熱で過ごせた事は一度もありません。20年間私の肝臓に棲み続けたウイルスを排除することは、容易ではないのです。

私の場合副作用の中で一番強いのは、だるさです。このだるさが体力気力を奪い、殆ど寝たきり状態で暮らしています。食欲もありませんので、体重も一同目の投与から2か月で約4キロ落ちました。

急性肝炎を発症した時の症状とよくにているなと思っています。でもあの頃は息子たちが幼かった。だから早く病院から出て元気になってあげなければいけないと思っていました。でも今は、自分を奮い立たせる気力もなく、何をやる気にもなれず、だるい重たい体を持て余しています。

家事は一切長男に任せ、長男が仕事の帰りがけ、何が食べたいか？欲しいものがあるか？毎回聞いてくるので、お願いしてしまっています。

私はこれまでずっとパートの仕事をしていました。理解のある職場で、私の薬害肝炎訴訟の活動にも理解を示してくれていました。本当は、最初の入院治療のあとは、仕事に復帰したかったのですが、こんな状態がいつまで続くか分からず、しばらくは治療に専念

するしかないので仕事を辞めてしまいました。

4 検証委員の方々にお願いしたいこと

私達C型肝炎被害者は、たった一本の血液製剤のせいで長い闘病を余儀なくされました。1977年にアメリカのFDAが承認を取り消した時、1987年に青森の三沢で集団感染が報道された時などは、承認を取り消すきっかけをなりえたはずです。それなのに、この二つの大きな事件後も、この製剤は作られ続け、承認され続けてきました。

そして1988年6月6日私の血管にもこの悪意に満ちた製剤は投与されました。当時私は勇気がなく、医師に感染原因を聞くこともできませんでした。でも当時の資料を精査し、当時の関係者に正直に事情を話していただく事が大切だとおもいます。委員の皆様、厚労省の皆様、20年も経ってどうしてこの製剤が蔓延したのか、私の肝臓に棲み続ける事になったのか？真相を迫及するのは大変なご努力が必要だと思います。ですが、どうかそれをやり遂げてください。そしてその結果を今後薬害が再び起こらないための再発防止策に活かしてください。薬害が再び繰り返されるようなことがあれば、私たちの被害が何ら教訓として活かされることがなく終わるのであれば、亡くなった原告さん達、これからもまだまだ生きて闘病を続けなければならない私たち被害者は、全く報われません。

もし私が亡くなったとしても、私の息子たちには、きちんと報告できるようにしてください。委員の皆様、厚労省の皆様、重ねてお願いいたします。

陳 述 書

第1 はじめに

私は、418人のリストの『389番』の被害者です。2007年11月6日、病院から告知を受けて、初めてフィブリノゲン製剤を投与されたことを知りました。16年以上にわたって、国からの連絡も製薬企業からの連絡もなく、放置されて続けてきました。

二度と薬害を繰り返さないで欲しい、私の被害と思いが、少しでも真相究明と再発防止につながればと思い、本日、お話しをさせていただきます。

第2 フィブリノゲン投与と急性肝炎

1 フィブリノゲン投与

私がフィブリノゲン製剤を投与されたのは、1991年3月23日のことでした。当時、小学校1年生の長女、春から幼稚園に入る長男の2児の母でした。3人目の子どもは、妊娠37週目でした。

その前日、破水を起こした私は、病院に行きましたが、死産となってしまいました。その後、私の子宮からの出血が止まらなくなりました。後に知ることとなるのですが、このとき私に、フィブリノゲン製剤3本が投与されました。

2 急性肝炎

私は、3人目のこどもを亡くしたことで、精神的に耐えられないほどのショックを受けていました。目の前にいる子どもや、夫が励ましましてくれることで、何とか自分を保っている状態でした。

4月6日には退院しました。

しばらくすると、黄疸が出て、体がだるく引きずられるように重くなりました。4月20日に出産した病院で診てもらったところ、急性肝炎と診

断され、即入院を指示されました。原因は輸血だと説明されました。医師からは、肝炎は慢性化すると、肝硬変や肝がんに行進するとも説明されました。

この時の入院でつらかったことがあります。出産で主治医をつとめてくれたドクターが、私を廊下の遠くから見つけると避けるようにしていたのです。

私は、こどもの死産の直前に、実の父を肝臓がんで亡くしていました。肝臓がんで苦しむ父の姿から、肝臓がんのおそろしさを目の当たりにしたばかりでした。自分が肝炎にかかったときのつらさは言葉にもなりません。

第3 肝炎と日々

1 インターフェロン

私が病院を退院したのは、1か月以上経ってからのことでした。体はだるく、退院してからも、家事育児も満足にできませんでした。

その後、慢性肝炎と診断され、医師からは、「このままでは5年から20年の命です」と言われたのです。小さな我が子を置いては死ねないと、すがる様な思いでインターフェロン治療に踏み切りました。それは、1991年秋ころだったと思います。

予想を超える副作用が私を襲ってきました。40度近い発熱が続いて、意識が朦朧とする日々でした。

子どものためにも元気な体に戻らなければならない、その一心で副作用に耐えました。

しかし、ウイルスは体の中から消えてはくれませんでした。

その後、私は、ときには毎日のように強ミノ注射を受けるために病院へ通いました。それでも肝機能数値が悪くなって、入院したこともありました。私がいなくても子たちが生きていけるように、それまではなんとか生きてい

かなければいけない，そう思って治療を続けていたのです。

私は，肝炎になったことを恨みました。思うように動かない身体で，育児も思うようにできませんでした。自分自身が生きていくのがやっとでした。

若い息子からは，「今度いつ病院に行くの？」と言われたこともありました。私は，「明日，注射を打ちに行くよ」と答えました。すると息子は，「ううん，長く行くのはいつ？」と聞いてきました。こどもにもつらく寂しい思いをさせていたとわかりました。

家族には本当に申し訳なく思いました。しかし，運命だから仕方がないと自分に言い聞かせてきました。

こうして，治療の効果がないままに何年もの月日が，いたずらに過ぎていきました。

第4 フィブリノゲン製剤投与の告知

1 病院に対する問い合わせ

それから何年か経って薬害肝炎のことが報道されるようになりました。報道を見て，「私も本当はフィブリノゲンを使われたのかもしれない」と思いました。そこで，一度病院に確認してみましたが，病院からはカルテがないからわからないと説明されました。

私自身，確証のあることではなかったもので，それ以上，カルテを探そうという気にはなりませんでした。

2 病院からの告知

ところが，2007年11月6日，病院からの連絡がありました。フィブリノゲンを使った418人のリストに加地さんも入っている，そう告げられました。

私は，「やっぱりそうだったのか」と思うのが精一杯でした。それ以上は，

頭の中が真っ白になって何も考えられませんでした。

3 娘の言葉

私は、娘に連絡して、418名のリストに入っていたことを伝えました。すると、娘は、真っ先に「お母さん、身体はどうなの？」と聞いてきました。そして、「長生きして欲しい」と涙声で言われました。

娘は、私が肝炎と向き合うことを避けていることを感じとっていました。小さい頃から私に無理をさせまいと、受験勉強中でも出来る事は「かあさん無理しなくていいよ」と言って自分でしてくれたし、買い物した荷物さえも私には持たせなかったりといろいろな気を使いながら、その一方で、肝炎のことは何も口にしませんでした。

しかし、このときようやく、娘がずっと私の体を心から心配していたことに気がつきました。「治療も受けて欲しい、でもお母さんのことを思うと口に出せない」、娘のつらい気持ちにようやく気づかされたのです。

自分一人の命ではない、肝炎から逃げてはいけない、肝炎と向き合わなければいけない。病院からの連絡をきっかけに、再び肝炎と向き合うことができるようになりました。

4 診断結果

私は、連絡を受けて間もなく、病院で診察を受けました。連絡をしてくれた病院は、国や企業を相手に提訴するかどうかをまず尋ねてくれました。

しかし、何よりも先に自分が今、どんな状態かを知りたいと思いました。そこで、検査を受けることを優先させたのです。

肝炎から逃げ続けていた日々は、私につらい現実を突きつけました。

検査結果が出るまで、実は、私は肝炎が治っているかも知れないと淡い期待を抱いていたのです。しかし、実際には、私の慢性肝炎はどんどんと進行し、すでに肝硬変の一步手前までできていたのです。

第5 私の思い—放置された悔しさ

418人のリストは、2002年には製薬企業から国にわたりました。もし2002年に告知してくれれば、そのときに娘や家族の気持ちに気づくことができただろうと思うと残念です。

そうすれば、きっと家族に正直に治療ができていないことを打ち明けられただろうと思うのです。そして、再び肝炎と向き合って、治療を始めることができたと思います。医学の進歩について説明を受け、インターフェロンにも再び挑戦し、今のように肝硬変の手前までなることはなかったと思います。

「一日でも早く知らせてほしかった」。私は悔しくてなりません。

第6 検証委員会に望むこと

国と製薬企業が早期に対応をとっていれば、被害は防げただけでなく拡大しなくて済んだはずです。

引き返せる時は、いくつもあつたはずなのに、そのまま使われ続けたのはなぜなのだろうと思います。

また、これほど広い医療分野で、野放図に使われ続けたのもなぜなのだろうと思います。

さらに薬害被害者が、ただ被害を受けたばかりでなく、放置され続けた点も悲しくてなりません。被害者への告知も、やろうと思えばいつでもできたのに、2002年に企業から418人リストを提出されたときですら、告知をしませんでした。隠しました。

国と企業がなぜ被害を防がなかったのか、なぜ被害者へ告知することなく放置したのか。なぜ、隠したのか。私には、システムだけの問題だけでなく、製薬企業と厚生労働省に、人の命を大切にしようという意識が皆無だったとしか思えません。

この薬害肝炎は、非常に長い期間にわたって被害者を出し続けました。長い間にいろいろな人々が関わってなぜ防げなかったのでしょうか。それは、単なるシステムの問題なのでしょうか。こうした疑問を是非、検証委員会の委員の方々には、明らかにしていただきたいのです。

私は現在、教育現場に身を置いています。教育者として命の大切さを子どもたちに伝えたい、そして、命を大切にする国を残してあげたい、安心して医療を受けられるようになりたい。心からそう願っています。

薬害再発防止は、私たち肝炎原告団、弁護団、そして支援者みんなの願いです。この検証委員会の成果により、薬害が防止されなかった原因、患者が放置された原因を明らかにして、幾度となく繰り返されている薬害が今後は二度と（薬害が）起こらないシステム、そして、一人一人の命が大切される社会をぜひ作っていただきたいと思います。

以 上

2008年6月5日

加 地 智 子

1 はじめに

今日は、私の話を聞くための時間をとってくださって、ありがとうございます。

私は、1986（昭和61）年4月22日に生まれました。

あとで分かったことですが、生まれたその日に、クリスマスが殺与されました。

2 両親が、C型肝炎感染を知ったこと

C型肝炎に感染していることを、私より先に知ったのは、両親です。小学校4年生の時です。病院から呼びかけがありました。これに応じて検査を受けたら、肝炎に感染していることがわかったそうです。

ただ、両親は、まだ小学生だった私に、肝炎だとは告知できませんでした。お医者さんと相談して、もう少し成長するまで、黙っておくことにしました。私は、何も知らされないまま、小学校に通いました。

3 倦怠感や体調不良が多かったこと

2002（平成14）年の春、中学校を卒業しました。

卒業後は、ファーストフード店で仕事を始めました。

仕事は、経験や技術にあわせて、仕事内容や時給が変わるシステムになっていました。早く一人前になって、お客様担当になりたいと思いました。

しかし、体がだるくて、体調がよくないことがしばしばでした。人目に分かるほどでした。職場の人たちから、「きつそうやね」、「病院に行きなさい」などによく言われました。

私には、どうして何度も体調が悪くなるのか、わかりませんでした。結局いつも、「人より少し体が弱いのかな」とか、「風邪で微熱が出やすいんだろう」と考えて、家で寝ていることしかできませんでした。

4 C型肝炎感染を知ったこと

18歳になった年に、母が「お前は実は病気なんだよ」と言いました。はじめて、自分がC型肝炎という病気であることを知りました。

母は、「無理をしてはいけない」とか、「お酒を飲んではいけない」と、一生懸命話をしてくれました。当時の私には、「私は肝臓が悪いらしい」というくらいしか、理解ができませんでした。

後から、家にあった、「家庭の医学」という本を読みました。そして、C型肝炎が肝硬変・肝臓ガンといった重い病気に進む病気だということを知りました。その日から、私は、テレビや新聞で、「C型肝炎」という言葉を見かけた時には、注意をして見るようになりました。ただ、どの特集を見ても、「苦しい治療をしても、治ったり治らな

かったりする」といったことしか言ってくれませんでした。

その後は、アルバイトもせず、家で母の手伝いをしていることがほとんどでした。家にいると、「私は何をしているんだろう」といった気持ちの焦りもでてきます。

けれど、私には、他にどうすることもできませんでした。

5 インターフェロン治療の苦労

2006（平成18）年6月、インターフェロン治療を始めました。

はじめは、病院に入院をしました。39度ちかくの熱が出ました。寒気もして、体も痛くて、私は、「何でこんなことしないといけないんだろう」と泣きたくなりました。

その時の私は、まだ20歳になったばかりでした。20歳って、ほんとはもっと、やりたいことがいっぱいあって、元気な時なんじゃないかなと思いました。でも、病気を治したい一心で、インターフェロン治療を続けました。

退院後も、週に1回の注射を、打ち続けました。

しばらくすると、毎日頭痛がして、体がだるくて、夕方からはあまり動けなくなりました。白血球も減って、薬を減らしても、なかなか回復しませんでした。医師からは、「これ以上、白血球が減ったら、インターフェロンを中止しないとけない」と言われた時期もありました。

インターフェロンを続けるには、毎月4～5万円のお金がかかりました。両親に申し訳なくて、仕方ありませんでした。

1年たった頃、お医者さんから、「ウイルスが減るのに時間がかかったから、このままだと、またウイルスが出てくる心配がある。だから、もう半年、インターフェロンをしないとけない。」と言われました。インターフェロンが終わることだけを目指して、辛い治療に耐えてきたので、ショックで、治療をする気力もなくなりそうでした。両親も、不安や、半年分も余分にかかる治療費のことで、大変だっただろうと思います。

1年半たって、ようやく、インターフェロンが終わりました。一応、ウイルスは消えたようです。ただ、本当に消えたかのかがわからないので、その後も病院に通って、血液検査を続けています。

6 検証会議に期待する私の気持ち

10代の後半から今まで、いつも不安な気持ちですごしてきました。仕事ができるのか、好きな人に肝炎だと告白できるのか、結婚できるのか、子どもを持てるのか、不安なことばかりでした。本当なら、もっと、将来の夢とか、明るい未来とか、そういうものがあっていいんじゃないかな、と思うこともありました。でも、C型肝炎が治らない限り、未来を考えることさえできませんでした。

幸い、両親のおかげでインターフェロン治療を受けることができました。そして、今はウイルスが検出限界値をきりました。ただ、少しでも無理をすると、またウイル

スが出てくるのではないかという不安は消えません。きっと、この先もずっと、こういう気持ちを抱えて生きていくのだろうと思います。

今日、みなさんに聞いていただきたいのは、クリスマシンのような薬がなければ、私達は、こんな思いをしなくてもよかったということです。私が投与を受けたのは、加熱製剤が承認された後の時期に当たります。ミドリ十字は、ウイルス対策の不十分な非加熱製剤をちゃんと回収しなかったそうです。たくさんの人達が、それぞれ一人一人お苦しみや、悲しみを抱えているのだと思います。私も、私の家族も、本当に苦しんできました。

どうしてこんなことになったのか、きちんと調査してほしいです。

そして、これから、肝炎の不安を抱えて生きていく私達に、調査の結果を全て教えてほしいと思っています。

どうぞ、よろしく御願いたします。